Asian Summer School in Bangkok 2018

2018年8月13日 － 25日
（英語研修　8月7日 － 10日）
中部大学および中部大学大学院参加者による報告

工学研究科　建設工学専攻　1年　佐橋　寛也
都市建設工学科　4年　島崎　雅悠輝
英語英米文化学科　3年　本田　浩章
英語英米文化学科　3年　清水　菜摘
英語英米文化学科　1年　高橋　成実
宇宙航空理工学科　1年　山本　瑞稀

内容

1. 本プログラム目的 2
2. 個人の参加目的 2
3. 事前英語研修について 3
4. 日本以外の参加国および参加者 3
5. プログラム日程 5
6. プログラムを通して 6
6.1 講義 6
6.2 フィールドワーク 7
6.3 学ぶにあたって 8
7. 異文化交流を通して 9
7.1 タイの文化について 9
7.2 言語について 10
7.3 参加者について 11
8. 感想 12
9. 今後に向けての改善点 12

1. 本プログラム目的

Asian Summer School 2018では、アジアの持続的開発に関わる諸問題とGIS(Geographic Information System)および、GISがその諸問題にどう貢献しているのかということを学ぶ。その学びを通して、発展著しいアジアの現状と問題、GISのツールとしての有用性などについての認識を深めることを目的とする。また、講義はすべて英語で行われ、英語による知識の吸収に取り組む。その過程で、国際感覚や、卒業論文、修士論文での問題意識が育まれることが期待される。（佐橋　寛也）

2. 個人の参加目的

佐橋　初の異国の地で多文化圏の人々と、英語を通してコミュニケーションを図ってみたいと思ったため。それと、修士論文に役立つアイデアが得られればと考え、参加した。

本田　英語を学ぶのではなく専門的な事を英語で学ぶという新しい事に興味を持ち、GISについてもっと詳しく知りたいと思ったため今回のプログラムを志望した。

島崎　GISは研究で使用し、農業は祖父が営んでおり、私にとって両者はなじみ深いものであったため、とてもプログラムに興味があった。また、たくさんの国々の人との交流をしたかった。

高橋　今まで学ぶ機会がなかったGISや農業について学ぶことが可能だったため。また、多くの国から参加者を募っていることを知り、このサマースクールに参加した。

清水　様々な国の人々と友達になり、サマースクール後も交流を続けて世界中に友達を作るため。また、自分の専門外となるGISなどについても英語で学び、常に英語を使う環境での英語力向上を目指し参加しました。

山本　たくさんの講義、フィールドワークを通し将来的に役立つ知識を得、他国文化交流をはかり、経験を経て、自分の考えや視野を広げるために参加を決めた。

3. 事前英語研修について

本プログラム前の4日間、AITの先生による授業があった。環境問題を学ぶことを通して読む、書く、聞く、話すの4技能を身につけた。一日中英語で授業を受けたことは今までになく、初日はとても疲れた。しかし、それがあったからこそ本プログラムでのよりアカデミックな英語による授業も臆することがなかった。あるテーマについてのディスカッションやインタビューなど普段の授業と違ったアクティブな授業であった。また、プレゼンテーションをする機会が2回あった。そのまとめ方や発表の時の注意点等を教えて貰い、本プログラムでのプレゼンテーションや、日本でのプレゼンテーション作成、発表に役立った。4技能だけでなく、語彙もたくさん習得した。自分の分野外の単語をいかに知らないかを実感した。また、それらを得たため、本プログラムでの講義で度々登場した際、辞書を引く手間がなかったので話を聞き逃すことなく授業を受けることが出来た。(山本　瑞稀)

研修風景

4. 日本以外の参加国および参加者

● インド
氏名：Mukesh Kumar Vishal　　性別：男性
所属：Indian Institute of Technology

● カンボジア王国
氏名：Sami Sivuth　　性別：男性
所属：Aruna Technology

氏名：Suong Sovan　　性別：男性
所属：Aruna Technology

● タイ王国
氏名：Wirawee Linswanon　　性別：女性
所属：Silpakorn University

氏名：Sasawat Thangthira　　性別：男性
所属：Srinakaharinwirot University

● ネパール連邦民主共和国
氏名：Radhika Bhandari 性別：女性
所属：Kathmandu University

● パキスタン
氏名：Tarique Ahmed Abbasi 性別：男性
所属：Sukkur IBA University

● バングラデシュ人民共和国
氏名：Faiyad H Rishal 性別：男性
所属：Jahangirnagar University

● フィリピン共和国
氏名：Honey Rose Penes 性別：女性
所属：Bicol University

● ベトナム社会主義共和国
氏名：Vu Hai Nam 性別：男性
所属：Thinklabs

計8カ国　　計10名

参加メンバー全員のパスポート

5. プログラム日程

8月6日	日本出発＆タイ到着
８月７日～８月１０日	英語研修
8月11日	アユタヤ遺跡
8月12日	バンコク
8月13日	オープニングセレモニー、地理情報
	Arc GIS、地理情報＆位置情報
8月14日	GNSS
	スマート農業、UAV
8月15日	宇宙工学
	スマート農業のための地理情報、気候変動による水問題
8月16日	フィールドワーク:GISTDA
8月17日	UAV,GNSS体験
	UAV データ処理
8月18日	フィールドワーク:Khao Hin Sron Development Study Center
	フィールドワーク:メロン農家
8月19日	フィールドワーク:The Golden jubilee Museum
8月20日	オープンストリートマップ
	地理空間解析
8月21日	農業の環境情報
	ビックデータ、農業
8月22日	アグリビジネス
	タイの農業、IoT
8月23日	フィールドワーク:PASCO
8月24日	クロージングセレモニー
8月25日	アリゲーター動物園
8月26日	タイ出国＆日本到着

6.　プログラムを通して

6.1　講義

大学院大学であるアジア工科大学院(AIT)ということもあり、専門性と難易度が高いものが多い印象を受けた。それが、普段聞き慣れていない英語で繰り返されるということもあり、時々理解できず困惑してしまう場面もあった。ただ、内容についてはユニークで面白い題材ばかりであり、自分自身の修士論文に役立つアイデアを得るという面では、有意義であった。扱われた題材は、「ユビキタス地理情報学・農業におけるGISの利用について・相互運用可能な位置情報サービス・全地球測位衛星システム(GNSS)・農業用モバイルビデオ処理プラットフォーム・無人飛行機(UAV)を利用したアプリケーション・地球規模の気候変動への影響と水資源・地理空間データのクラウドソーシング・オープンストリートマップ(OSM)・フリーオープンソースソフトウェアを用いた地理空間解析・気候情報とリモートセンシング(RS)とモデリングとの連携による農業における意思決定支援・農業経営・タイのスマートファームetc.」など多岐にわたる。その中で、ドローンの操縦や衛星情報を利用した測量体験、複数の空撮写真を利用したAITの敷地モデリング、OSMの情報更新、UAVから取得したデータの処理など、貴重かつ達成感のある体験をすることができた。（佐橋　寛也）

地理空間解析をしている様子

UAVを操作している様子

授業風景

6.2　フィールドワーク

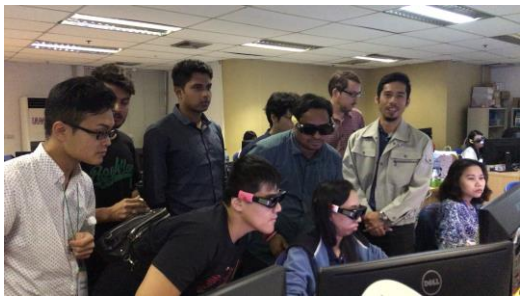
本プログラムでは、講義だけではなくフィールドワークも盛んに行われた。最初に訪れたGISTDAでは衛星を使用して地理情報等を集めている。衛星の軌道、衛星写真の送受信方法や衛星に設置されたカメラの位置、そしてその後の衛星から送られた写真の処理方法などかなり詳細な話を聞くことができた。私たちが、講習を受けている目の前では、オペレーションルームのようなものがあり、実際にモニターを通じて、動いている衛星の位置を確認することができた。衛星写真はタイの衛星を使用して撮っているのだが、ただ雨季はタイでは雲が多く、鮮明な写真は撮れないようである。また、併設された資料館では宇宙について学ぶことができた。特に無重力体験では上下左右に回転できるシートに体をくくりつけ、開始と同時にあべこべな方向に回しまくるので、三半規管の弱い人間には無理だと思った。

土日には、Khao Hin Sorn Royal Development Study Center にて話を聞いた。ここは、昔の工業化により荒れ果ててしまった土地をタイ国王の命により、国有地化し、植林などを得て自然を元に戻した実績のある国立センターである。ここでは、ただ自然を元に戻すのではなく、沢山の果実などの農作物を育て、タイ全体の農業技術の改良に尽力している。同日に訪れたLomSook Farmでは日本では見ることができないバタナッツを栽培している現場を見ることができた。また、ここで育てているメロンは静岡ブランドのメロンであり、とても驚いた。The Golden Jubilee Museum of Agriculture Officeは、農業に特化した施設であり、実際に農業技術取得のための研修を５か月間受けることができる。また、施設内の資料館では、３Dアニメーションを用いて当施設概要についてわかりやすく説明を行っていた。

最後にプログラムとして訪問したのは、PASCOである。日系企業であり、本社は日本にある。ここでは、航空機を使用して撮った航空写真の情報をもとに、地図を制作していた。その地図情報は細かくカーブミラーまで描いてしまうほどである。作業としては、道路、建物、木などの情報を図形化し、それぞれレイヤーを用いて細分化させる。最終的には統合させて一つの地図データを作成する。特に驚いたのが、職場ではパソコンに対して３D眼鏡を着用し、航空写真の建物が浮き出るようにさせ、作業効率を上げていた。

こういったフィールドワークを通じて、学びやすくプログラムが構成されており、毎日が本当に充実していた。（島崎　雅悠輝）

GISTDA にて話を聞く様子



PASCOにて作業画面を覗く様子

6.3　学ぶにあたって

講義、フィールドワークを通して新たな知識を得、新たな発見をした。それについて自身の中で考えを広げたり、疑問を深めることが何度もあり、授業が退屈だと感じたことはほとんどないに等しかった。しかし、数ある講義の中には、元々の語彙不足、知識不足に加え専門的な内容・語彙、また、ネイティブ講師が多かったことから、スピードが早く講義を聞き取り理解することにとても苦労することが多くあった。疑問点は講師に聞くこともあったが他国の参加者に聞くことの方が多かった。初めは語彙、内容に関すること、わからないことは全てインターネットで調べていた。ある日、サポーターの人に「ここに集まっている参加者はネイティブでは無いけど日本人参加者より英語ができる人たちだし、今回学べることに関して働いたり、研究したり学んだりしている人達だから自分でインターネットで調べるより彼らに聞くといいよ。コミュニケーションをとるから、自身の英語の練習にもなる。」とアドバイスを頂いた。以降、そのようにすることを心がけた。聞くと、プラスアルファのことも教えて下さり、そのことが次の日の講義に役立つことも多々あった。

また、講義を聞き取るためにも意識したことがある。それはノートテイキングだ。講義の内容、意味のわからない語彙、疑問点、思ったこと、多くをノートに書き留めていた。小学校の頃から耳にタコができるほどそう言われていたからだ。しかしそれでは、話を聞き逃してしまうことも多かった。それを見かねた参加者の一人が「ノートに書き留めるのでは無く自分の中に落とし込むようにした方がいいのでは？」と提案をしてくれた。その後、ノートに書留めることは必要最低限にすると、授業内容を聞き逃すことが少なくなり、より新たな発見があり、このプログラムをより充実させることが出来た。

このプログラムに参加して、日本での普段のように受け身でいては知識を得ることも、英語でコミュニケーションをとることもできないことを感じた。日本にいては出会うことのできなかったであろう外国の人と繋がれることはこのプログラムの大きなメリットであるが、それをメリットとできるか、デメリットとなってしまうかは自身の積極性に関わってくると感じた。（山本　瑞稀）

疑問点を質問する様子

自分の考えについて質問・議論する様子

7. 異文化交流を通して

7.1　タイの文化について

文化は衣・食・住で構成されている。しかし、私の意見では、タイの衣の部分は日本とあまり変わりがなかったと感じた。次に住だが、こちらは日本とかなり違っていると感じた。例えば、初日、タイに到着し飛行機から降りた。その瞬間、不思議な香りが漂って来た。後に判明するが、それはココナッツの香りだった。さらに、到着口から荷物受け取り口に向かう途中50m程スロープを歩いた。驚いたのは、壁両面に絵や像が置いてあったことである。離陸前に日本の空港を歩いた時はそのようなものはなかった。また、他にも、大学内の寮には壁に装飾が施されていたり、寮と寮の間にはテニスやバトミントンができるコートが設置してあったことにも驚きを感じた。また、タイの街中やお店には国王の写真が飾ってあり、タイの人々が国の元首を大切にしていることをとても感じた。タイはとても親日国で、日本のファストフード店であるすき家やCoCo壱番屋、牛角などが並んでいた。また、セブンイレブンはタイでもかなりのシェアを押さえており、町中に店舗が見られた。そして、タイを走っている車は日本車ばかりであり、日本人として親しみを感じた。

食については、 講義がある日は大学の中にあるカフェテリアで食事をとった。そこではタイの家庭料理のようなものを毎日提供してくれた。大抵、ご飯と肉類、スープが提供された。肉は牛肉や豚肉も少なからずあったが、カフェテリアだけでなく市場やレストランでは鶏肉のメニューが多くみうけられた。フィールドワークに行った時、そこの近くにある地元の店で昼食を食べた。そこで提供された料理が私を驚かせた。白菜やパクチーなどの野菜、豚肉、春雨、そして、揚げ玉にピンクのソースをかけたものが出された。タイ出身の参加者やアシスタントに聞くと「タイすき焼き」という答えが返って来た。ソースの味に少し怯えながら一口食べてみると、甘いドロッとした不思議な味がした。

このように、タイの食と住に四六時中驚いていた。しかし、3週間タイで過ごしたことによって、タイに存在する優しく甘い雰囲気を少し味わうことができた。その雰囲気を思い出し、これからも精進していきたい。（高橋　成実）

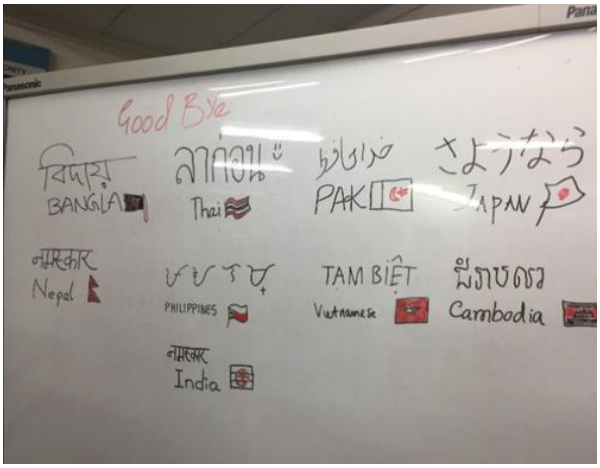
テニスコート

CoCo壱番屋

7.2　言語について

今回のプログラムでは授業を受ける際、使う言語は英語でもちろん生徒間でコミュニケーションを取るのも英語だ。私が今まで英語と言われ真っ先に思い浮かんだのがアメリカ訛りの英語だ。だが今回のアジアサマースクールで、様々なアジア諸国出身の国籍の異なった生徒たちと触れ合い私の固定概念が少し変化したので、ここに記したいと思う。まず、全体的な印象としては一人一人の生徒が自分自身のアクセント（訛り）についてあまり気にせず話していると言う事だ。私たち日本人はアメリカ英語を教育の場面で多く学ぶ為なのかつい、アメリカ人のように英語を話すのが普通のような考えに至ってしまいがちだが、彼らが話すのを見る限りそのようなことは関係なく自分たちの言語にあった発音の仕方で彼ら自身の英語を話していた。その中でも、インド出身の参加者は英語を自分の言語として話すのだが、インド訛りがありRの発音で舌を巻く癖があり、尚且つ話すスピードが早いので何を言っているのか理解するのが一苦労だった。タイのアクセントは言葉を話す度に文末の言葉が下に少しトーンが落ちることが多く、たまに違う単語に聞こえることがあった。カンボジア出身の生徒は、比較的に話しやすく彼らなりの発音の仕方で周りに分かりやすい英語で話しているようだった。生徒によっては、少しイギリス訛りの英語を話す生徒も数人いた。イギリス英語のほうが比較的一単語をはっきりと発音するので日本人の私たちからは、少し聞き取りやすいのかもしれない。今回のプログラムでは、自分の英語の発音などを気にして話さないよりも、相手に通じるように自分のできる最大限の発音で話すことが大切だと学んだ。（本田　浩章）

英語の会話で盛り上がる様子



各国の言葉でのさようなら

7.3　参加者について

他の国の参加者全員がGISについて学んでおり、授業中やフィールドワークの時などみんな真剣に話を聞いていた。私はGISについての知識はほぼなかったため授業の時などついていけないことが多かった。しかし、PCを使う授業で一緒にやりながらゆっくり説明をしてくれたり、ホテルに戻るためのバンの待ち時間やバンの中でなど移動中に授業で習ったことを教えてくれ、わからないならいいとほったらかしにするのではなく、一緒に二週間がんばろうという気持ちが伝わってきてすごくうれしかった。また、全員がフレンドリーでみんな初日の授業から打ち解けていてみんなで写真を撮ったり、お昼ご飯を一緒の席で食べたりした。また、私はみんなから笑顔がいいねと言われることがよくある。そんな笑うと目が閉じるくらい目を細めて、全部の歯が見えるくらいの私の笑顔を真似たり、アジアでは使われないアメリカのスラング”Gotcha″を使っていたらサマースクールのメンバーの中で流行りみんなが使っていたりと本当に楽しい人たちばかりであった。一番下が１８歳、一番上が４７歳、そしてみんな違う母国語を持っていたり、違う文化を持っていたのにもかかわらず２週間でできたとは思えない絆が生まれた。

お調子者でちょっかいをかけるのが大好きだけど、心優しいタイ人のYai。楽しむときは楽しみ、注意するときはちゃんと注意してくれてみんなをまとめてくれた私たちのママ、タイ人のArisa。インド英語訛りが強くて聞き取りづらいけど自分の意思をしっかり持っていて、たまに見せる笑顔がかわいいインド人のMukesh。家族みんな日本が大好きでアニメの主題歌に使われている日本語の曲を歌うのが上手なフィリピン人のHoney。一緒の部屋になったとき毎朝起こしてくれたり、間違っていることがあればその時に直してくれるしっかりもののネパール人のRadika。最後にムービーを作ってくれたり、事前準備を怠らず、いつも盛り上げてくれたベトナム人のNam。プレゼンが面白くていつもギャグセンスが高く、みんなに好かれていたタイ人のView。いつもみんなの写真を撮ってくれて、すぐに誰とでも仲良くなる才能を持っているカンボジア人のSovan。私たちよりも女子力が高いけど、私たちが寒がっているときは服を貸してくれたり、ここぞというとき頼りがいのあるタイ人のWan。いつもにこにこ微笑んでくれて最年長だけどみんなと楽しみ、みんなよりもはしゃいでいた私たちのパパ、カンボジア人のSami。２０歳とは思えない大人っぽい顔だけど中身はまだまだ子供、お互いに通じてなくて会話が成り立っていなくても別れの時、私たちが泣いていると涙を拭いてくれたり、ハグしてくれたり、クロコダイルが嫌いな優しいパキスタン人のTarique。誰に対しても優しくて、気が付いたら急にいなくなってよくみんなを困らせてたけど、好奇心旺盛でみんなから評価される考え方を持った一番の問題児であり、一番のgentleman、バングラデシュ人のRishal。こんなにも魅力の詰まったメンバーに出会えたこと、すごく短く感じたけど内容の濃すぎた２週間はこの先の人生でもう二度と経験することはないだろう。しかし、それぞれの国に帰国後もメッセンジャーでやり取りをしている私たちは一生の仲間である。（清水　菜摘）

クロージングセレモニーにて

8. 感想

佐橋　このプログラムから学んだこと、得たアイデア、参加者の見習うべき姿勢、英語によるコミュニケーションから感じたことなどを今後の糧としていきたい。

本田　今回のプログラムで学んだ内容など、友人、家族などに伝え続けていきたいと思う。また、英語でプレゼンテーションをするという経験を生かしていきたいと思う。

島崎　学びはもちろんであるが、参加者とのふれあいを通じ、それぞれの国の魅力や文化を体感することができたので素晴らしい機会であった。また、祖国を大事にする思いも教わった。

高橋　思い立ったら行動する大切さを学んだ。また、このサマースクールで学んだことを忘れずに、これからもGISや環境問題に関心を持っていたい。

清水　大親友ができたり、専門外のGISを学び、GIS以外の大切な事もこのサマースクールを通してたくさん学んだ。サマースクールに参加しただけで終わらせず、参加して自分自身に関して気づいたことをこれからの人生で活かし、自分に自信を持って生きていくと改めて決意した。

山本　この3週間で異文化を学んだだけでなく多くの知識、そして海外の人との繋がりをえた。得たこと、感じたこと、考えたことを自分に落とし込み、今後に生かしていきたい。

9. 今後に向けての改善点

　このプログラムの目的はアジアの持続的開発に関わる諸問題とGISの関わりについて学び、その理解を深めることである。これを主眼な目的とするのであれば、他大学からも参加者を募ってみても良いのではと考える。

　講義のレベルは、大学院大学のAITということもあり易しいものばかりではなかった。それに伴い、事前に講義資料を公開して欲しかったというのが率直な感想である。興味のある単元だけでも予習をすることができれば、更なる理解に繋がるように思う。

　今後もアジアサマースクールが、プログラムを向上させながら続いていくことを願っております。最後に、アジアサマースクール2018を執り行なうに当たり、ご尽力された全ての方々に心からお礼を申し上げます。（佐橋　寛也）